



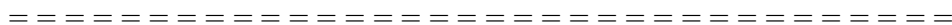
地域日本語支援ニュース こだま 第 313 号

2017.2.23



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる

カエルプロジェクト

～ブラジルに帰国後の子どもたちをサポートするために～

柴崎 敏男

今回は ABIC（NPO 法人国際社会貢献センター）のブラジル教育支援プロジェクトスタッフの柴崎敏男さんによるサンパウロ市の「カエルプロジェクト」の紹介です。これは来日後、または日本生まれで一定の時期を日本で育った子どもたちが、親と共にブラジルに戻った後の学校・社会への復帰・順応を支援するため、ブラジル三井物産が支援しているプロジェクトです。三井物産在職中の 2005 年からブラジル人児童生徒の支援活動을続けて 13 年の柴崎さんに、このプロジェクトについての思いを綴っていただきました。

皆さん、「カエル」と聞くと、何を思い浮かべますか？

当然、あの緑色（もちろん世界には赤や黄色や茶色のカエルもありますが、取り敢えず一般的な緑色としましょう）の、オタマジャクシから変態するカエルを思い浮かべることと思います。

この名称を考えた、ブラジル・サンパウロ市の中川郷子さん（博士・臨床心理士）も、よく見かける普通のカエルを頭に描きました。その理由は三つあり

ます。一つは「帰国」する意味の「帰る」です。二つ目は、カエルが両生類であり、オタマジャクシの時には水中で鰓呼吸をしています。成体のカエルになると陸上生活に適した肺呼吸になるように、日本とブラジルの異なった環境でも上手く生活できる「カエル（蛙）」です。最後はオタマジャクシからカエルへと大きな変態を遂げる、メタモルフォーゼ（変態）の意味の「変える」、つまり大きく変化をして欲しいという願いが込められています。

では、カエルプロジェクトとはどんな活動でしょう。

ご存知の通り、1990年6月から日本では改正入管法が施行され、多くの日系人がブラジルから来日しました。当時の賃金格差や為替レートが有利に働き、成功したデカセギの人々の話が話題になりました。ところが、その陰で苦しんでいた子どもたちがいたのです。日本に行ったものの生活にも学校にもなじまず、その後ブラジルに帰国した子どもたちが、学力不足、言語問題、友人関係、イジメの後遺症……などから心理的に追い込まれているケースが多くみられました。それらの子どもたちをケアするために、中川郷子さんご夫妻によってサンパウロ市で「カエルプロジェクト」が立ち上げられたのが、1996年でした。ブラジル三井物産は2008年からこの活動を支援するようになりました。

プロジェクトは、中川郷子さんを中心に、5人のスタッフ（心理学医、遊戯・教育心理専門家等）でサポートチームを組み、サンパウロ市内の対象となる子どもが多く集中する地区・学校で、家庭及び学校と協力して子弟の様子に応じて個人ないしグループ単位でケア活動を進めています。

- （1）心理面のケア（遊戯、読書、作文、カウンセリング等）
 - （2）学習面のケア（補習授業、教科講習等）
 - （3）環境面のケア（父母、学校指導部・教員へのオリエンテーション等）
- です。

現在約80名の子どもたちのケアをしています。具体的には

- ・ 週に一度、学校を訪問して指導
- ・ 遊び道具(おもちゃ) やお話での学び
- ・ 心理教育学的、文化的指導
- ・ 文化の違いは認めても価値判断はしない
- ・ 自尊心が低いケースが多いので、良い点を見つけ褒めて伸ばす

中川郷子さんのお話では、帰国した子どもたちの中には大きな苦悩を持つ子どもが多く、対人関係が難しく孤立したり、興味が欠如し、気持ちも不安定になっ

ています。そのため攻撃的になる子もいるし、逆に受身の子もいます。中には特別なケアの必要性のある子どももいます。

子どもの抱える困難さは、ポルトガル語が不自由という言葉の問題や日本と異なるカリキュラムのために学ぶ順番が異なることからきます。さらに、文化の違い、対人関係、家族がらみのことなど、友達とも分かち合えない感情的な事柄は子どもたちにとって大きな困難です。

また、学校側の期待感との相違もストレスの原因となっています。大多数の先生は、多少問題があっても自然に解決すると言い、ケアが必要な子どもが放っておかれていることがあります。良い教師、友達との出会いでうまくいっている場合もありますが、システム化されておらず出会いに頼ることは、救われない子どもがいるということで問題です。

カエルプロジェクトでは、子どもたちの成長を促し、また将来を考え、進み方を指導しています。

その他の重要な課題として中川さんが挙げているのは、子どもの生育に関わる両親の役割の自覚と、子どもたちには物質的でない富の価値を認識させることです。もう一つは最近注目されている特別な必要性のある子どものケアです。カエルプロジェクトの役割はまだまだ続きそうです。

子どもはどこにいても学ぶ権利があります。日本でもこのようにきめ細かい育成がなされることを願っています。

2009年から8年継続している、日本で開催しているカエルプロジェクトセミナーに関しては、機会があれば後日別途報告をします。
